

鯨井の伝説

近頃文明近代化の波に押され、急速に昔が失われつつあるとき、子供時代母親から「暗くならないうちに早く帰っておいで、オオカ「狐」に化かされるから」と言われた。なかば本気にして育った人々は、大体大正生まれ迄の人達で、其の年齢も現在60歳になりなるとしています。今鯨井に伝わる伝説を語り遺すことには、大きな意義があると思われまますので、主として、鯨井の古老の人々には、密かに囁やかれながら、いまだ活字化されていないものも、掘り起こして、鯨井史に遺してみたいと思います。鯨井の伝説とは、如何なるもので御座いましょう。

当時「昔」の実生活を背景にして、其の生活に強く関連のあった出来事が根源をなし、人々はそれを心の中の戒とし、又、郷土の誇りとして、語り合い、語り伝え、郷土に生計を支えて生きついで来た、豊かな、郷土人共通の糧として、今日迄、伝わって来たものではないでしょうか。

伝説は、郷土に生を受けた、私達の心の中に生きていくものではなくてはならないし、又、伝説の中に含まれた祖先の教え、郷土愛の精神を、真の情感にこめて、語り伝えて行かなければ意味をもつものと思われまます。何故ならば、鯨井の伝説の中には、それが直接地名と結びつき、又、鯨井の人々に、神「自然」が下された物への分かち合いの心を教え、災害時の相互扶助の精神を説く、先人の教訓が、真心として息づいているからでございます。

鯨井には、昔、遠く関西迄鳴り響いた、酒造りに適した水が、泉となって、渾々として湧いていましたこれが養老の泉の伝説となり、遂に鯨井固有の「有泉」と云う地名になりました。

又、徹底した、自給自足の強いられた時代、農耕によってとれた食糧と、天然の川魚に淡泊源を求めて生命を支えた人々に、乏しい限定された食糧を、分かち合って生きていく教えを含んだ伝説が、オイテケ堀の魚取りではないかとおもわれまます。

現代の火災は、119番で通報され、常備消防隊は、地元の者より先に現地に着くようになりましたが、昔は、火元の様子を、いち早く知らせた犬で、ぐっすり寝込んだ人達に聞こえる異様の物音は、パチパチ、ドカーンという、草屋根を支えている太い竹のはじける音と、一斉に吠え立てる犬達の声でした。

昔から犬は「物怪」を退ぞける力があるとされ、御嶽様のお使いは、オオカミ様、であり、昭和初期迄、御嶽神社から、オオカミ様のお姿のお札を受けトボロ「入り口」に張って置き見張り役をお願いしたものです

ある大風の冬枯の晩発生した、藁ボッチの火事を、狂気の如く走り廻り吠え立てて、

村人を起こした白い犬を、かいま見た人の口から口に伝わり、稲荷様のお使い、オイナリ狐と云う事になり、狐のお陰で大火事にならなかった事と深く信じて感謝し、益々、稲荷信仰を通じて、村中一致団結して、不時の災害に立ち向かう心の支えとして活して来ました。

こうして伝説は、当時の人々の生活に結びつき、長い間教訓として、生き続けて来たのです。

鯨井 清水光太郎

鯨井史より 昭和58年3月31日 発行